

『楽業』という道

— 2度のリカレント教育の果実 —



夢はバラ色

姉崎 正治*

Life path as “RAKUGYOU”
-Fruits based on two recurrent educations-

Key Words : Recurrent education, Fateful encounters, Doctorate,
Zen practice, Potosi silver mine

1. はじめに

筆者は73歳の秋、2016年9月25日大阪大学秋季卒業式・大学院学位授与式(図1)で博士(人間科学)を拝受した。その授与式では、「総長祝辞」の冒頭、西尾章次郎総長から筆者に起立を促され、「特に、自然科学分野と人文学・社会科学分野をクロスした高度な博士人材の輩出の典型あるいは模範を実現した」と紹介を頂いた。これは指導教員人間科学研究科の三好恵真子教授の指導のもと『個人の中の文理融合』を目指して研究を続けてきた結果であり、その労苦が報われた瞬間であった。加えて、NHKはじめ主要各紙に紹介して頂き晴れがましい気分を味わうことが出来た。

今は駆け出しのポストドク研究者の段階であるが、本年6月に喜寿を迎えた筆者には、若い先生方のような未来はもうない。幸い博士後期課程修了後の半年間、大阪大学(以降阪大)グローバルコラボレーションセンターの特任研究員を経て、2016年4月より産業技術短期大学(以降産技短大)の特任教授として現職につくことが出来た。そして阪大在籍中の機縁により、2019年4月から3か年間の科研費研究が採用され、80歳前まで公的に研究できる幸運に預かっている。

今回『生産と技術』誌から頂いた「夢はバラ色」の執筆依頼は、前述の三好恵真子教授の配慮による



図1 学位授与式会場前

ものと理解している。三好教授は筆者の博士前期課程、後期課程の指導教員であり、その後も変わらない厚情を頂いている人生の師でもある。

本稿の執筆にあたり、社会人時代の先輩から託された『楽業』という道を主題にして、筆者の「夢はバラ色」について記述したい。その基軸は2度のリカレント教育にあり、その上に、前後して3回の運命的な方向転換の機会に出会ったお蔭で今日があることを、筆者の人間形成の過程と捉えて記述することにした。

2度のリカレント教育は要約すると次の通りである。1度目は、1958年4月中卒社会人として住友金属工業(株)(以降住友金属)に入社して後、6年間の社内実務を体験して鉄鋼短期大学(現在の産業技術短期大学、以降産技短大)へ進学する機会を得、短大卒業後引き続き2年間の京都大学(以降京大)留学の機会を与えられて、通算4年間に鉄鋼技術の基盤学術を習得することが出来た事である。1960～1980年代は、鉄鋼業界の高度成長とプロセス開発



* Shoji ANEZAKI

1942年6月生まれ
大阪大学大学院人間科学研究科(2015年)
現在、(学校法人)鉄鋼学園 産業技術
短期大学 機械工学科 特任教授
工学博士、博士(人間科学) 鉄鋼製造工
学 人間科学(文理融合研究)
TEL: 06-6431-7561(産業技術短期大学)
FAX: 06-6431-5998(同上)
E-mail: kin.pot.si@gmail.com

の最盛期にあたり、思う存分に研究活動が出来た。最大の成果の一つが、1985年3月(41歳)に東京大学(以降東大)工学博士号授与に繋がったことである。

2度目のリカレントは、45年間務めた住友金属の退職を機に、2004年4月大阪外国語大学(以降大阪外大)スペイン語学科夜間主コースに進学し、2007年大阪大学(以降、阪大)との合併後、阪大大学院人間科学研究科へ進学、前述の73歳での博士(人間科学)を授与されるに至った過程である。更にそこから本年科研費研究に採用されて、喜寿になった今日も近未来へつながる夢を描いている。

2. 運命的な出会い；リカレントへ誘う3回の転換点

2-1. 中卒社会人の職工が研究開発者になる；1度目のリカレントとその果実

中卒社会人を決心したのは、卒業を前にした1957年12月「住友金属和歌山教習所」の新潟での初採用のチャンスであった。当時は多くの学生は貧困を理由に中卒で社会に出るのが珍しくはなかった。給料が支給され3年間の教育期間を終われば将来熟練工として職場の中核迄出世できる。その話をよしとして、独断で受験を決め、合格してから両親に報告した。両親らの年代の夢は『末は博士か大臣か』であり、口癖でもあったが、はるかに遠いものであった。この初採用とのめぐりあわせは、今も神の計らいであったと思っている。そこから未来が大きく開いていくことになったのである。

鉄鋼業界による「(関西)鉄鋼短期大学(以降鉄鋼短大)」の開設は1960年10月に認可され、1962年4月の開校が決定した。資格は現場実務経験3年が条件であり、筆者は教習所卒業後3年間「研究試験課」の製鉄研究室と製鋼研究室で研究補助業務を経験した。この間コークス、焼結鉱の製造試験、高炉の反応解析、平炉の水素サンプリング、水銀滴下式水素分析と装置のガラス細工等々、更に研究試験課長と同副長の博士論文実験の補助をし、同時に東大、京大、阪大卒の技術者や熟練技能者の指導を受けて研究の面白さに引き付けられ、確実に進学への意欲を高じていった。

筆者は会社近郊の西土入にある本遇寺に下宿し、阪大受験用のテキストを使った受験勉強を通して、

1964年4月無事鉄鋼短大鉄鋼科に3期生で入学した。本遇寺の住職藤下了諦師から臚の一句を頂いた。それは『大空へ羽ばたきたつや若人の切なる願い今にかなわん』であり、胸躍る青春の一時であった。

鉄鋼短大では京大工学部とほぼ同じカリキュラムで120単位程度学んだ。全寮制でもあり猛烈に勉強できた一方、鉄鋼業界全般にわたって現在に繋がる友人のネットワークが出来た。この同窓会ネットワークは、科研費研究のフィールドワークで重要な協力体制になっている。

短大卒業後の1966年4月、引き続き京大工学部鉄冶金学研究室(盛利貞教授)へ留学を許された。澤村宏鉄鋼短大初代学長の存在と当時短大の鉄冶金学で直接指導を受けた盛利貞京大教授との関係および日向方齊住友金属社長の配慮で留学がかなえられた。

京大では「溶鉄の吸窒と脱窒の速度論」を研究し、当時自動車用薄鋼板の時効歪みの原因物質である窒素の制御に繋がる重要な課題であった。1968年学振製鋼第54委員会で発表した論文¹⁾は大きな反響を呼んだ。更に表面活性元素の速度論的障壁を提言した²⁾。当時、溶鉄の表面活性元素である酸素と硫黄に関心が高まっていて、研究ブームに一石を投じた。

この研究が生かされたのは、研究所に配属になった1970年、鹿島製鉄所第二製鋼工場の転炉形状の決定に繋がった時である。鹿島建設本部の実質上のトップであった富田副本部長(技師長)から意見を求められ、筆者の実験に基づく転炉形状の提案を受け入れてくれ、即座に設計変更を指示された。この転炉が後に博士論文に繋がることになった。その転炉を使った複合吹錬法の大型実験の結果に基づく論文が1985年3月22日の東大工学博士号に繋がったのである。論文は佐野信雄工学部教授を主査とする5人の教授によって審査され合格とされた³⁾。

この時の博論に繋がる学術的な人脈は、明治時代以来の日本の鉄鋼冶金学の系譜の柱であった。前半は野呂景義一斉藤大吉一澤村宏一盛利貞と続く京大系の系譜であり、後半の佐野教授もまた野呂景義一俵國一吉川春十、田中清治・・・一佐野信雄と繋がる東大系の系譜であった⁴⁾。

一方実験に際して、大型転炉の底に底吹き用の孔をあけるとい判断は、当時の植田嗣治製鋼部長が言われた「転炉の底が破れたら俺が責任とる！」の

一言で決まり、大規模実験が出来たのである。1960年代は、日本経済の高度成長期にあり鉄鋼業の拡大期でもあって、プロセス開発の課題に恵まれていた。1980年代までは、研究開発者にとって最もやりがいがあった時代であった。筆者はその幸運な時代に出会えたといえる。

2-2. ブラジル厄払い旅行；次のリカレントの源流



図2 同級生8人の厄払い旅行記

1982年12月27日から翌年1月7日の間、教習所同期生8名とブラジル旅行を決行した。42歳目前の「厄払い」の旅は7年前に計画し、毎月貯金をして実現したものである。筆者にとって、それ迄の「勤勉実直」から「人生は楽しむもの」へと人生観が変わってしまうほど衝撃的な体験であった。同行の友人清家藤助氏（2006年12月64歳で永眠）は旅の出来事を克明に記録していた。後日奥様が遺品の中からその記録を発見し、『ブラジル記（紀）行』（図2）として2009年に出版⁵⁾にこぎつけたのである。この旅では、筆者以外の6人は海外旅行が初めての面々であり、原田昇氏の引率手腕により、この上ない極上の楽しさを味わわせて貰えたのである。教習所同期の原田昇氏は、天理大学受験を目指している間、前述の本遇寺住職の碁仲間として諸中傍にいた仲であり、通信教育で大学受験資格取得の同行の友でもあった。彼は天理大学に次いで大阪外大夜間コースの1期生としてロシア語を習得した。同時に旅行業をアルバイトにしていたが、イギリスへ渡って英語を学んだ後1975年3月にブラジルへ“農業移民”

し、12月に2世と結婚してしまった。ブラジルでは旅行会社ユニベルツール、ツニプラトラベルで経験を積み、シェルマール社の重役として6年間活躍していた。1982年のブラジル旅行は、このような原田昇氏の誘いによって実現した。筆者らは旅の最中の1月5日住友金属サンパウロ事務所で玉井次長に面会した。当時ポルトガル語を学んでいたが、玉井次長から『やるならスペイン語です！ポルトガル語はその後でも良い。スペイン語圏は広くて面白い！』この一言で筆者がスペイン語に転向し、会社勤務の傍ら独学で進めることになり、ラテンアメリカに夢中になったのである。この忠告こそが筆者が大阪外大スペイン語学科に進学することになった発端であり、第2のリカレントの源流になったのである。

2-3. 大阪外大から阪大大学院へ；2度目のリカレントとその果実

2002年6月、45年間務めた住友金属（内後半の8年間は関係会社へ出向）を定年退職した。60歳を新たな20歳と決め、過去を裁断して第二の人生をスタートさせた。当初、夫婦で約1年間メキシコのグアナファトに移住し、語学学校に通いながらのスペイン語圏での生活を始めていた。しかしこれは未来の見えない無謀な試みであったようだ。

翌年7月たまたまメキシコに来ていた長女の妊娠の異常がわかり、急遽通訳として半ば強制的に帰国することになった。この帰国騒ぎも必要不可欠な神の計らいであったと感謝している。

帰国してから日本での本格的なスペイン語学習を決意した。半年間の受験勉強の後、大阪外大スペイン語学科夜間主コースを社会人受験した。その時の面接官が後の卒論指導教員になる染田秀藤教授（2010年大阪大学を定年退職、名誉教授）であった。そして3年目、染田教授の授業用テキスト「ラテアメリカ史」の中で『ポトシ銀山水銀アマルガム製錬法』に出会ったのである。この水銀アマルガム法に触発され、それが卒論⁶⁾、修論⁷⁾、博論⁸⁾を貫く主テーマになったのである。

水銀との出会いはそれ以前の中学時代に、新潟水俣病の発生した阿賀野川でハゼ釣りをしていた頃、その有害性を知ったことに始まり、和歌山の研究試験課で水素分析装置の水銀を浴びて水槽に投げ込ま

れた事件を経験した。その後、鹿島製鉄所の転炉形状研究、博論の複合吹錬法の研究で水銀を使ったモデル実験が決め手になるという有用性も経験しており、潜在的に記憶に残っていた身近な元素であった。それらの底流が触発を誘発したのであろう。

染田教授には工学的思考の強い筆者を修論迄、正指導教員として丁寧に指導して頂いた。そして、染田教授のライフワークであるラス・カサスを学び、のちにペルー副王領の絶対主義を完成する第五代副王フランシスコ・デ・トレドを知ることになった。この両者から筆者の近未来に繋がる研究課題が生まれたのである。

三好恵真子教授とは博士前期課程の副指導教員、後期課程の正指導教員として今日に繋がる長期間の縁を持つことになった。人間科学研究科では希少価値的存在の理工系の先生であると共に、文理融合研究を目指しておられた先進的な先生であった。

筆者は大学院時代2回にわたってシルバーボランティア協会から中国山西省太原市にある太原鋼鉄公司へ技術指導に派遣された。また自らの研究で、都市鉱山開発と名打って『学内携帯電話回収』を2回実施した。一方三好教授からは『伯楽セミナー』の講師、学生環境ボランティアグループへの講演、廃棄物資源循環学会や生活学会他数々の学会発表と論文投稿を勧められ大学院生活は充実したものとなった。三好教授の指導は正に全方位型であった。お蔭で、博士後期課程の3年間のこれらの諸活動が認められ、大学の計らいでJASSO 第一種奨学金の『全額免除』に繋がった。

しかし一方、後期課程の2011年1月にリウマチを拗らせて器質化肺炎を誘発し、2か月間国立刀根山病院に入院することになった。この病後観察もあり、後期課程の2年間延長処置をとった。更に博論提出直前の2015年1月リウマチが再発し半年間の延長を余儀なくされ、三好教授を悩ます中、5年半をかけて、2015年9月25日ようやく大学院学位授与式に漕ぎ着けることが出来た。三好教授の配慮による粘り勝ちであった。今思えば、延長以前の時点では、自分の博論は未完成であったことがわかる。2年半の延長で、ようやく納得のいく姿になったのだ。正に難産であり命がけの作品になった。これが筆者の2回目のリカレントの果実であった。

学位授与式で「総長祝辞」で述べられた文理融合

研究の流れは、その後2016年2月25日発行の『OUFCブックレット第8巻』「中国の食・健康・環境の現状から導く東アジアの未来—地域研究における文理融合研究の探求—」⁹⁾¹⁰⁾の議論に引きつがれた。

また、学位授与後の10月からの半年間、阪大グローバルコラボレーションセンター特任研究員を経て、2016年4月に現在の産技短大の特任教授に3年間の契約で任用された。その後2016年9月12日から始まった阪大法学部田中仁教授、理学部豊田岐聡教授（現副学長）を中心とする『21世紀課題群をめぐる文理の対話』（通称『まちかねCAFÉ』）という研究会のメンバーに入れて頂いたことがきっかけで、今日の科研費研究に繋がっているのである。

現在の科研費研究は、2016年当時特任教授として『日本鉄鋼業の粗鋼一億トンを支える教育システム—鉄鋼業の現場主義と現場力向上を目指す巨大な構想—』を研究テーマとしていたこともあって、2017年10月27日の第8回『まちかねCAFÉ』で話題提供させて頂いたのが出発点となっている。その延長線上で、昨年末学振に申請した科研費研究、「50年の実績に基づくリカレント工業教育の研究」が2019年4月に採用され、3年間の公的研究が始まることになった。必然的に鉄鋼学園との契約は3年延長になり、とうとう80歳まで脳の酷使が続くことになってしまった。これも『楽業』の道なのであろう。この研究会に入るようになった経緯も三好教授の長年の筋書きであったと考えている。

三好教授は兼ね兼ね筆者を「職人的研究者」と形容しておられたが言い当て妙であり、「職人」という言葉は筆者の生きざまを表現するのに相応しいものだと考えている。職工からようやく職人になり、更にその先には匠の境地を暗示しているように思えて、これが筆者独自の『楽業』の道であろうと推察している。

一方では、三好教授が2017年3月20日の日本生活学会の「博士論文賞」申請書の中で述べられている推薦理由を拝見して、先生が抱く職人的研究者の真意がわかり感涙したものである。正に研究指導者の鏡であると思っている。

3. 人間形成を思う；『楽業』という大道

3-1. 人に出会うという事

1958年4月住友金属和歌山教習所の坂東所長から

『一隅を照らす人間になれ（伝教大師最澄の言葉の一節）』という訓示を頂いた。その一言が底流にあって、全寮制の中で同級生らと人間形成を通して今日まで続く絆が深まった。このことが同級生8人によるブラジル旅行を生み出し成功させた源泉である。

筆者は前述のとおり、2016年4月に産技短大特任教授に任命されたが、学園理事長は元新日鐵住金社長（現在、日本製鉄相談役）の友野宏氏である。20年ぶりの出会いであり、筆者が住友金属の現役時代、製鋼部門の同年代の同僚でもある。更に、約10年後輩の山本高郁氏（現在京大特任教授）が、2007年に招聘教授として阪大工学研究科に派遣されていたことで、阪大での筆者の修論、博論の重要な実験や行事で尽力して頂いた。また約20年後輩で製鋼研究室配属の樋口善彦氏が、2015年に産技短大に教授として派遣されており、筆者の特任教授審査資料の大半を準備して頂いた。なお樋口教授は科研費研究の研究協力者でもある。このような住友金属のネットワークが張り廻らされている中で筆者は助けられて来たのである。令和元年4月に「住友」の名は消え、日本製鉄（株）になったが、「住友人」の繋がりは失われることはない確信している。

科研費研究の研究協力者には、上述の樋口教授の他、産技短大の小島彰学長（元鉄鋼協会専務理事、経産省四国通商産業局長他歴任）と、学園内に併設されている人材開発センター長の糟谷晃弘（元新日鐵出身）も加わっており、万全の布陣である。

一流の人物に出会うことはそうあるものではない。しかし筆者の『楽業』という道では大事な場面で必ず一流の人物が深く関与している。重複になるが、大学関係者として、京大への道では澤村宏元鉄鋼短大初代学長（京大名誉教授、1967年11月勲二等旭日重光章）、盛利貞京大名誉教授教授（1991年11月勲二等瑞宝章）、東大の博論では佐野信雄名誉教授（2012年5月瑞宝中授章）であり、皆高德の文化勲章受章者でもある。社会人では、住友金属工業（株）日向方齊元社長、栗田満信元専務取締役、上述の友野宏元新日鐵住金社長、富田技師長（元鹿島建設本部副本部長）である。恩師でもある先生方には、阪大の染田秀藤元教授と三好恵真子教授及び鉄鋼短大時代の岩井彦哉元教授（阪大工学部卒、2018年5月逝去、94歳）である。

写真の『楽業』の額（図3）は、1985年3月に東

大工学博士号を拝受した時に、当時の住友金属鹿島製鉄所長の栗田満信氏より、所属している坐禅同好会の10周年記念に頂いたものであるが、縁あって、道友たちの厚意により筆者に寄贈され、今は書斎に飾られてある。以来、この『楽業』の二文字は筆者の脳裏から離れず日々思い起こすものとなった。その栗田氏が令和元年4月に94歳で他界され、栗田氏からの宿題と筆者の人生を振り返る中で、改めてその真意を考えるに及び、本誌の主題にしたのである。



図3 栗田満信氏直筆の『楽業』

3-2. 禅の修行歴17年；老師の鉄槌は今も消えず

鹿島製鉄所に坐禅同好会が誕生したのは、丸川雄浄氏（1963年阪大理学部卒）が1972年10月に鹿島製鉄所技術部に転勤してすぐのことである。筆者は1970年に研究所から派遣されており、製鉄所の高炉・転炉の立上りから研究活動に入っていたが、技術部への配置転換で上下関係となり、結婚の世話や家が間近になったことから自然に仲間入りすることになった。

1979年3月人間禅教団三世総裁師家磨輒庵白田劫石老師（元千葉大学名誉教授、1988年勲二等瑞光章受章、2009年帰寂）に入門した。鹿島製鉄所の同好会が発展して1979年5月第1回鹿島修禅会が始まった。筆者はその時から10年間老師の侍者を務めた。結局筆者は入門前の1977年11月に同好会に初参加し、入門後1995年10月の退団までの約17年間禅の修行をし、その間老師の鉄槌を受けることになった。その鉄槌の痛みは未だに生き生きと残っている。

筆者は1974年3月に結婚していたが、妻も筆者の後に入門し、夫婦での修行生活が続くことになった。1984年6月、当時所有していた500坪の土地に、プレハブ造りの選挙事務所（3間×6間）の払い下げを受け、更に老師の隠寮等を新築して鹿島禅会に寄贈し「茨城道場」¹¹⁾となり、1988年5月人間禅教団坂東支部設立の基盤となった。茨城道場は約10年間使われ、道友の三浦大元氏（現石心庵老居士）の苦勞が実り、新しい本格的禅道場に引き継がれた。当時の上司であり道兄でもあった丸川雄浄氏は、その後師家分上となり葆光庵丸川春潭老師に、そして人間禅教団第五世総裁師家（2006—2019）になられた。

重大な岐路に立った時に、『百尺の竿頭一步』の踏切りが遺恨のない決断として、今日の状態を可能にしてきた。疑いなく17年間の禅の修行によって身に沁み込んだものから出たものであった。更に『無一物中無尽蔵』という源泉に裏付けられてか、好奇心は今も尽きることがなく、脳の酷使を促している。『楽業』を甘受できる境地になっているのは禅の修行によるところが大であると思っている。

昨年から磨瓢庵白田劫石老師の著書『槐安国語講話』の正編¹¹⁾と続編¹²⁾を再読している。正に老師に相見する思いであり、17年間の鉄槌上の痛棒を受けている。「黙って10年」、「更に参ぜよ30年」の重石がズシリと身に掛かる。人間形成の完成までには、10年の準備（忍耐）と30年の深化（精進）が必要である謂いであろう。匠への道はまだまだ厳しい。

3-3. 「リウマチ」と断酒：一病息災の今日

筆者は酒豪で有名であった。しかし2002年7月15日をもって断酒した。メキシコへ頻繁に通う何回目かのフライト中、ワインが引き金で全身に激痛が走った。これが断酒を決断させた瞬間であった。入学前の2004年1月9日、受験勉強のストレスから四肢の関節に痛みが発症、診察の結果慢性リウマチと診断され、先々の長い闘病を悲観して失意に陥った。進学をあきらめかけた時、妻の一撃的忠告に突き動かされ入学することになった。その後15年間は断酒の生活をするようになった。この間次女の夫君が幸い整形外科医であり、通院しつつ大学生活を楽しむ中で、ほぼ心配のない寛解状態を維持することになった。しかし前述のとおり、博士後期課程

の大事な時に再発し、2年半の延長を余儀なくされた。一方では断酒という決断によって、脳を酷使する大学生生活11年半をやり切れたと思っている。お蔭で二つ目の博士号にたどり着いたのである。不思議なことに喜寿になった今も、癌らしき兆候は見られない。何が功を奏するかわからない。これからもリウマチを一病息災の友として怒らせない程度に無理もしていくことだと思っている。

戒めの一つは、「晩節を汚すことなかれ！」である。本年4月25日思い切って運転免許証を返納した。

4. これからの夢の道

喜寿とはいえ自称27歳である。しかし27歳は気概であって、自ずと老化現象が伴う。いずれにしても老衰するもの、だから、今は前を見るしか時間がない。そのために命を燃やし続ける。それが今の心境である。その事がなお更に、足元の3年間の科研費研究の先を見据えて好奇心を駆り立てている。

『楽業』の贈与者栗田満信氏は、令和元年4月1日「新日鐵住金」が改名して「日本製鉄」として誕生し、「住金」が消えた後の13日未明静かに永眠された。

2018年1月15日同氏を囲むOB会の席で、筆者が前述の研究課題を紹介した折に、「姉崎よ、鉄冶金学という学問はどうなるのかなー。無くなっても良いものかなー」と嘆かれたことが筆者への宿題であると受け取っている。この一言が、今の科研費研究の中に息づいている。鉄鋼学園の未来像を描き続ける基盤学術の一つとして私の推進力になっている。書齋の『楽業』は筆者に今もそう語りかけている。

筆者のこの先、『楽業』という道には次の二つの夢がある。一つは、科研費研究の中で鉄鋼学園の近未来像を描くことである。鉄鋼学園には日本の鉄鋼業という巨大なバックと50年間に蓄積された情報と経験がある。そこから鉄鋼学園独自のリカレントによる「向上のメカニズム」を明らかにし、教育環境が目覚ましく変わっていく近未来に向けて、“研ぎ澄まされた方向性”と“実現性のある未来像”を描き出すことにある。しかしこれは至難の業であるが、今やらなければならない課題でもある。これが科研費研究の最も肝心な命題であり、第1のリカレントの恩に報いる道でもある。

二つ目は、阪大の博論の延長線上で、ペルー副王領の五代副王フランシスコ・デ・トレド（1515

ー1582) (図4) という人物を追って、親友原田昇氏とスペインを旅行することである。最近ベネズエラの古本屋から、León Gómez Rivasの書籍『ペルー副王；ドン・フランシスコ・デ・トレド』¹⁴⁾を入手することが出来た。1994年版のこの本の参考文献を見ても、第五代副王フランシスコ・デ・トレドに関する研究が余りにも少ないのに疑念が深まるばかりである。



図4 ペルー副王領の第五代副王
フランシスコ・デ・トレド

2020年に、それらの関心を抱いてトレドの故郷スペインの歴史現場を旅することになっている。フランシスコ・デ・トレド家は元来スペインの有名な貴族である。彼の生地オロペッサ市とレコンキスタ時代の親族の活躍の場、更に我等がドン・キホーテの地ラ・マンチャ地方をフィールドワークして、歴史現場での情報収集と体感的調査をする予定である。

原田昇氏は旅行業の達人である。博論後の二人旅として既に、2019年1月末から2月いっぱいボリビアのポトシ銀山、ペルーのワンカベリカ水銀鉱山の現地調査を無事終えることが出来た(図5)。次の第2の現地調査であるスペインの旅も、原田昇氏とのドン・キホーテとサンチョ・パンサの楽しい旅になるはずである。夢はまだまだ続くことになる。

筆者の基盤には、住友金属という母なる人脈と、スペイン語に触発される世界と、産技短大・阪大という故郷がある。何も慌てることはない。『犬も歩けば棒に当たる』である。筆者は老犬ではあるが、『歩けば必ず棒に当たる』を信じて歩を進めていく。

青春に描いた阪大への夢が約60年たった今、新たな故郷になったのである。この長い道りが筆者の『楽業』の道である。そしてこれからも続いてい

く道でもあるが、最も重要な存在は妻康子であり、親友原田昇氏(現在ブラジル徳島県人会長)である。この二人が居てこそ『楽業』の旅である。



図5 原田昇氏(右)との旅(背景;ポトシ銀山)

最後に、筆者はこの「夢はバラ色」の執筆依頼を受け、改めて人生を振り返り、『楽業』という道に想いをはせる機会を得た。書き終えてみて、今はこれまでの多くの体験に感謝せずにはいられない心境である。また『生産と技術』誌の中の若い先生方の「若者」の記事、特に小沼健先生¹⁵⁾、長久保白先生¹⁶⁾、松倉悠先生¹⁷⁾の記事を読み、それぞれの先生方も『楽業』の道を歩んでおられる様子を知ることが出来嬉しい限りである。『楽業』という道は決して筆者だけのものではないのである。

追記であるが、本稿の回顧調の記事は、一昨年、生活学会から受けたインタビュー¹⁸⁾に続く詳細版である。

また本稿は、日本学術振興会 科学研究費助成事業(KAKEN)基盤研究(C)「50年の実績から描くスマート化する製造業の現場力向上へのリカレント工業教育の研究」(課題番号19K02414)の一環として実施された。ここに謝意を表する。

参考文献

- 1) 姉崎正治、盛利貞：学振第19委員会，No. 8782 (昭和43年7月)
- 2) 姉崎正治、清水高治、盛利貞：溶鉄の脱炭と脱窒に関する研究，鉄と鋼，vol. 57 (1971) pp.1109-1122
- 3) 姉崎正治：転炉における複合吹錬法の開発に関する研究，東京大学工学博士学位論文(昭和60年3月22日)
- 4) 日野光元：日本近代製鉄業設立から産学共同

- 研究体制確立史—後編, ふえらむ Vol. 23 (2018) No. 2, pp. 22-25
- 5) 清家藤助: ブラジル記 (紀) 行— 1982. 12. 27 ~ 1983. 1. 7, (有) 鹿島三星社 (平成 21 年 1 月 4 日)
- 6) 姉崎正治: ペルー副王領における銀鉱業と水銀汚染, 大阪外国語大学地域文化学科 (スペイン語), 卒業論文 (2008 年 3 月)
- 7) 姉崎正治: 水銀アマルガム法適用後の労働現場の実態について (ペルー第五代副王トレド治世下の鉱山労働の研究), 大阪大学大学院人間科学研究科修士学位論文 (2010 年 3 月)
- 8) 姉崎正治: 貴金属鉱業における金、銀、水銀に関する資源・環境問題の歴史的射程から未来へ連動する文理融合研究—ポトシ銀山技術の再評価および小規模金採掘の地域再生、都市鉱山の開発を包摂する持続可能性原理の討究—, 大阪大学大学院人間科学研究科博士学位論文 (2015 年 9 月 25 日)
- 9) 姉崎正治: 文理融合研究を考える機会として, 『中国の食・健康・環境の現状から導く東アジアの未来—地域研究における文理融合モデルの探求—, OUGC BOOKLET, vol. 8 (2016/2) pp. 113-116
- 10) 三好恵真子: 個人の中の文理融合への挑戦、実践的研究者育成への展望, 『中国の食・健康・環境の現状から導く東アジアの未来—地域研究における文理融合モデルの探求—, OUGC BOOKLET, vol. 8 (2016/2) pp. 136-150
- 11) 姉崎大光: 茨城道場建設への道, 『道心』第 32 号 (昭和 63 年 9 月 10 日) pp. 48-50
- 12) 白田劫石: 『槐安国語講話』, 第一法規出版 (株) (昭和 63 年 6 月 20 日) pp. 1-511
- 13) 白田劫石: 『続槐安国語講話』, 宗教法人 人間禅教団 (平成 5 年 4 月 8 日) pp. 1-624
- 14) León Gómez Rivas, *El Virrey del Perú- Don Francisco de Toledo*, Instituto Provincial de Investigaciones y Estudios Toledanos Diputación Provincial de Toledo, (1994)
- 15) 小沼健: 守・破・離, 『生産と技術』第 69 巻第 4 号 (2017) 30—32 頁
- 16) 長久保白: 人生は楽しい! —その秘訣、教えます!—, 『生産と技術』第 71 巻第 3 号 (2019) 46—48 頁
- 17) 松倉悠: そのうち道は開ける, 『生産と技術』第 71 巻第 3 号 (2019) 49—51 頁
- 18) 真鍋陸太郎、饗庭信: 日本生活学会の 100 人「姉崎正治」, Vol. 10 (2017) lifology.jp/people100/vol010anezaki/



Kida